

ハイエク『致命的な思い上がり』の成立過程に関する一試論 —「進化と自生的秩序」メモを中心に—¹⁾

A New Light on the Birth of F. A. Hayek's *Fatal Conceit* — Examining “Evolution and Spontaneous Order”

吉野裕介
YOSHINO Yusuke

1. 『致命的な思い上がり』をめぐる「真贋論争」

1988年に刊行された『致命的な思い上がり』(*Fatal Conceit*, 以下FCと略記)は、これまでハイエク(Friedrich August von Hayek, 1899-1992)の最後の著作、集大成として扱われてきた。しかし、それが世に出るまでの経緯は単純なものではない。ハイエクは、1979年『法と立法と自由』(以下LLLと略記)の三部作を完成させてすぐに次の作品の準備に取りかかった。1983年には、すでに題名を『致命的な思い上がり』と決め、1985年には、予定ではあるが目次を作成していた(嶋津, 1985, 317)。しかしながら、それ以降かれの体調は悪化し、著作の出版を全うすることが難しくなった。それゆえFCは、ハイエクになり代わって、バートリー三世(Bartley, W. W.)がかれの文章を編纂し、ハイエクの監修のもとで発行したものである。ただしバートリーは、その後体調が思わしくない状態になり、結局ハイエクよりも先に1990年に物故してしまう。そのため、最後はハイエクが出版できる状態にした。このような経緯のため、FCの内容は、バートリーの手が加えられている可能性を否定できず、どの部分がハイエクの真の主張であるかが見極めにくい。

研究者の間でも、次のような意見の相違が見られる。例えば現在刊行中のアメリカ版ハイエク全集の責任者であるコールドウェルは、近著『ハイエクの挑戦』において、その内容にはおおむね好意的な評価を与えながらも、FCを「多くのレベルで問題がある」(Caldwell 2004, 316)著作とみなしている。かれは「その本(FC)への寄与が、どの程度ハイエクによってなされ、どの程度バートリーによってなされたのかがはっきりとしない」(*Ibid.*, 317)と指摘する。かれによれば、FCは、ハイエクとバートリーの貢献に差があり、さらにその境界がどこにあるのかは、これまで必ずしも明らかになっていない。

ただしコールドウェルは、FCの中身について、ハイエクの進化論的な主張と、合理主義に對抗するという生涯を通じたハイエクの企てが反映されているため、この点に関しては少なくともかれの意図に沿うものであろう、としている(Caldwell, 2004, 319)。

江頭・塘は、先のコールドウェルの指摘に触れながら、FCについて「とりあえずはハイエ

¹⁾ 当該未公開文書の引用と翻訳にあたって、許可をくださった Bruce Caldwell 教授に感謝の意を申し上げる。I thank Bruce Caldwell (the General Editor of the Collected Works of F. A. Hayek) for granting permission to quote and translate from unpublished materials contained at the Hayek Collection, Hoover Institution, Stanford Univ., California, U.S.A. また調査にあたっては、文部科学省による京都大学 21 世紀 COE プログラム「先端経済分析のインターフェイス拠点の形成：理論・応用・政策の創生と融合」から、平成 17 年度若手研究者研究活動資金の助成を受けた。

クの意図を反映させたもの」(江頭・塘, 2004, 36)として扱っている。しかしながら、その成立過程に関しては、別途再検討する必要があると付け加えている。かくして、先の二つの研究は、FCがハイエクの意図を反映したものであることをおおむね認めるものであると良いであろう。

しかしながら、FCの内容に疑義を申し立てる意見もある。ハイエクに関する伝記的著作の著者であるエーベンシュテインは、バートリーを元来「過激な書き手」とみなしたうえで、FCの内容にバートリーの主観が入りすぎていると述べる(Ebenstein, 2001, 213)。また現代オーストリー学派の代表格であるベッケは、「その本(FC)は、事実に関する点かつ知的な面で、(ハイエクの)プロジェクトを基礎的な批判に対して大変もろくさせている誤りに満ちている」(Boettke 2000, p. xxxiv)として、その内容の妥当性自体を疑っている。

このようにFCをめぐるには、その微妙な成立事情ゆえに、「真贋論争」とも言える状況にある。そこでいま必要とされるのは、全体としてFC自体の真贋を問うのではなく、ハイエクの残した文書を吟味することで、FCにおいて真にハイエクの主張である部分を明らかにすることであろう。

2. ハイエクが記した「メモ」

ハイエクは1960年に『自由の条件』(以下、CLと略記)を著して以降、積極的に社会哲学的な考察に入った。その際かれが用いた概念には、「自生的秩序」と「進化」がある。前者は、個々の行動の累積の結果、全体としては決して意図されることなく発生したシステムを指す。後者は、後に「文化的進化」としてかれ自身が発展させる社会発展のプロセスを記述するに導入した概念である。ハイエクの用いたこれらの概念は、かれの社会理論のなかでも特に後期の著作において、重要な位置を占めている²⁾。

ハイエクの著作のなかには、「双子の概念」について述べている箇所を、いくつか散見することができる。たとえば、1967年の論文「行動ルールの体系の進化に関する覚え書き」(“Notes on the evolution of systems of rules of conducts”)のなかで、「進化と自生的秩序の双子の概念と私が呼んだものは、要素の行動に関する規則性と、構造がもたらす規則性との間の相互作用について、理解を助けていた」(Hayek, 1967a, 77)と記している。また、1979年のLLLにおいても「私が進化と自生的秩序の双子の概念と呼んだものから、…われわれは、ある複雑なパターン相互作用によって、…複雑な構造物の持続性を説明できる」(Hayek, 1979, 158/訳219)と記している。しかしながら、この二つの概念の関係について、ハイエクが直接説明を加えた文章は、かれの主著『自由の条件』、『法と立法と自由』、そして最晩年の『致命的な思い上がり』にはこれまで収録されていなかった。

筆者は、この「双子の概念」がハイエクの社会哲学において中心的な役割を果たすにもかかわらず、それらの関係が十分に詳述されていないことに疑問を抱いたが、そのような折り、スタンフォード大学フーバー研究所のハイエク文庫を調査できる機会を得た。そこで、まさに「進化と自生的秩序」と題名が付けられたタイプスクリプト³⁾(以下、「メモ」と略記)を発見することができた。1983年ドイツのリンダウにて書かれたというその文章は、ハイエクの社

²⁾ 詳しくは、拙稿(吉野2006b)を参照されたい。

³⁾ Hayek (1983a) “spontaneous order and evolution”, Hoover Institution, Hayek Archives, Box110, Folder 26. 日付は、1983年6月28日とある。巻末に許可を得て邦訳を添付した。

会理論における「双子の概念」の重要性を示すだけでなく、1979年に発行されたLLLと1988年に刊行されたFCの間の時期におけるかれの思考にも光を当てるものと考えることができよう。

そして、もうひとつの重要な論文として、「われわれの道徳の起源と効果：科学への問題⁴⁾」(以下、「講演」と記す)に触れることができた。これは1983年にフーバー研究所で行われた講演を原稿にしたもので、論文集“The Essence of Hayek”(1985)に再録されている。先に発見した「メモ」と合わせ、ハイエクの最晩年⁵⁾の主張が詰まっていると言える。

上記の経緯から、本稿における課題を以下に設定する。第一に、この「メモ」をハイエクの執筆活動のなかで位置づける。1983年に記された「メモ」と1988年に刊行されたFCに見られる文章との比較検討により、その時期のかれの思考に迫る。第二に、ハイエクの最晩年の社会哲学に関する理論的側面について明らかにする。このため、前述の「メモ」の内容を検討し、「進化」と「自生的秩序」の直接的な結びつきを論じることで、かれの体系においてこの「双子の概念」がいかに重要であったのかを示す。

3. ハイエクにおける「進化」と「自生的秩序」

(1) メモ「進化と自生的秩序」

本節においては、「メモ」の内容について具体的に検討しよう。最初にハイエクは、1960年代に導入した自らの進化論を振り返り、こう述べている。「二十何年以上前に、私が進化と自生的秩序の形成に関する一対の問題の間にある、密接な関係に特に引きつけられて以来、正しい進化的アプローチが、人間行動の秩序に関して最も議論のある問題のいくつかに対して決定的な答えをもたらすことが、徐々にわかってきた」(Hayek, 1983a)。

ハイエクが進化論を明確に導入するのは、1960年に出版された『自由の条件』である。これ以降かれは、進化論を自らの社会哲学に取り入れ、自由な社会の発展がどのように行われるかについて追求した。かれのその問題意識は1973年から79年にわたって出版されたLLLにおいても引き継がれた。そしてその後の83年に書かれた「メモ」においても、人間行動に関する問題に対し答えを出しうるのは「正しい進化的アプローチ」であるとしている。ハイエクがどのような進化的アプローチを正しいとみなし、どれを誤っているとみなしたのかに関しては、次節以降に詳述する。

ハイエクは「正しい進化的アプローチ」に則った考察のためには、以下の三つの問題を検討する必要があると記している。それは「人類における進化概念の起源に関して…中略…次に、生物学と文化的進化一同様の方法での淘汰のみがある一とのメカニズムの間の決定的な差について、最後に、これが私の一番の課題であるが、科学的知識は人間の道徳の進化に関してどんなことを正当に言えるのか」(Ibid)である。次節以降、順に検討しよう。

⁴⁾ Hayek (1983b) “The origins and effects of our morals: a problem for science”, Hoover Institution, Hayek Archives, Box103, Folder35. 1983年11月1日にフーバー研究所で行われたスピーチをもとにしたものである。

⁵⁾ 本稿においては、ハイエクの生涯における「最晩年」をLLL出版以降の1979年から1992年、80歳から亡くなるまでとしておきたい。なお、この区切りは単に時間によるもので、ハイエクの理論的な内容に則ったものではない。

(2) 人類における進化概念の起源

まず「メモ」における一つ目の問題、「人類における進化概念の起源」について検討しよう。ハイエクによれば、人類において進化的アプローチは「ソクラテス以前のギリシャ哲学にも存在した」という。ただしそれらは、「アリストテレスの大きな影響によってもみ消された」のだという。この「メモ」に関する限りでは、アリストテレスの検討は、決して十分なものではないが、それは後に FC に現れる。

「アリストテレスの見方では、商業的活動のようなものは、そのとき存在する社会をそのまま維持するために必要な程度でよい、ということである。たとえばアテネが、それが存在した時期に、その人口をいかにして著しく増やしたかに関する問いは、決してアテネによって考察されてきたようには見えない」(Ibid)。こうハイエクが述べる時、かれがアリストテレスの社会観を静態的なものであると捉えていることがわかる。そしてそれは、かれの目指す進化的アプローチとは異なるのである。この「メモ」に見られるような、アリストテレスへの批判的な口調は、後の FC においても受け継がれている。以下に詳しく吟味しよう。

そこでハイエクはアリストテレスに関して、こう論じている。「かれ(筆者注:アリストテレス)は、秩序とは、伝令官の声が皆に聞こえるほどに小さい場所でのみ達成される、とはっきり述べている。かれにとって、非常に大きい数の人間は、秩序に参加しえないのである」(Hayek, 1988, p. 45)。つまり、アリストテレスは声の届く範囲の人間のみが、秩序に参加している存在と考えていた。「アリストテレスにとって、すべての人間活動はタクシス、つまり、秩序だった精神による、個人行動に関する意図的な組織化の結果である」(Ibid., 45)。ハイエクにとっては、人間活動の結果を、作られた秩序たるタクシスと考えるアリストテレスの考え方は支持されるものではなく、それは成長した秩序たるコスモスと考えられるべきである⁶⁾。

ハイエクは、アリストテレスの「秩序の範囲」が小さいことを、かれの静態的な社会・文明観に原因があると考え、それを批判する。「かれ(アリストテレス)は、人類を、その現存の形態で常に存在してきたかのように扱っている。この静態的な見方では、進化概念の入る余地はないし、今ある制度がいかに生じてきたかに関して問うことすらも、かれから遠ざけてしまった」(Hayek 1988 46)。ハイエクにとって、人間行動の分析は、常に動的なものではなくてはならないという考え方は、FC にも見られるものである。

ハイエクは、同様に「自生的秩序」の異なる言い方として、別の箇所「自己増殖的秩序」(self-generating order) という用語を用いている (Hayek 1979; ハイエクー今西 1979)。かれによれば、これは、システム論で用いられている用語であり、「要素がより大きい構造を作るべく行動する」(ハイエクー今西, 1979, 78) ような特徴を持った秩序のことである⁷⁾。ハイエクは、以下のことを指摘している。つまり、秩序を成り立たせている要素が秩序を形成しようとする性質を持ちながらも、そこに要素間の選択メカニズムが存在している⁸⁾。ここでは、自己増殖的秩序の一つの例として、分業を挙げている。「これらの自己増殖的秩序のなかで、もっとも重要なものの一つは、お互いに知らない人々の活動が相互調整されることを意味する、広

⁶⁾ ハイエクは LLL において、組織としてのタクシスと、自生的秩序としてのコスモスを対比させ、古代ギリシャ人との関係で次のように述べている。「外生的秩序ないし取り決めとしてつくられた秩序は、組織と叙述されよう。一方自己増殖的あるいは内生的と述べた成長した秩序は、英語では都合よく自生的秩序と叙述される。古代ギリシャ人はこれら二種類の秩序を表現するのに明確な単独の単語をもっていたという点でいっそう幸運であった。すなわち…つくられた秩序を表わすタクシスと、成長した秩序に対応するコスモスである」(Hayek, 1973, 37/訳 50)。

範な分業である」(Hayek, 1979, 159/訳 220)。

かれは同様に FC において、LLL まで繰り返し使っていた「自生的秩序 (spontaneous order)」の代わりに「拡張された秩序 (extended order)」という用語を多用する。これはお互いの顔が見える取引のみが行われる対面社会が、顔の見えない人とも市場取引をするまでに個人の行動の範囲が「拡張した」と見ていることによる。かれは、本人の予想を超えた知識を知らぬ間に利用可能なことが、分業の進んだ文明の利点であると考えている。

ハイエクの考える「拡張した」秩序は、知識の範囲が「拡張した」を示す。同様に、それは、人間の行為の獲得物として知識が選択され、伝播していくことを示している。「拡張的な秩序はすべて同時に成立したわけではなく、その成立過程は長く続いた。…この秩序の多様な構造、伝統、制度、そして他の構成物は、選択的な行為に関する習慣的な様式の変異として、徐々に生じた。…この進化は、獲得された習慣の伝達のプロセスによって新しいやり方が広がって行くことから生じた」(Hayek, 1988, 16)。

つまりハイエクが自生的秩序と同様に、「自己増殖的秩序」や「拡張された秩序」という用語で説明しようとした市場システムとは、常に動的であり、かつ徐々に複雑さの程度が増していくようなシステムのことである。そしてそこでは、個々の行為の伝達を通じて、人間の行動の結果として獲得した知識が伝播されていく。ここで明らかになるのは、状態として存在する秩序と、そこで起きている進化的プロセスが、常に結びついていることである。

動的な秩序と、その発展を説明する理論としての進化論は、ハイエクのなかでは常に一組である。ハイエクは、アリストテレスを「メモ」において進化的アプローチをゆがめた張本人として批判した。そして引き続き FC においても、「複雑な構造の形成に関する二つの決定的な側面、いわば、進化と秩序の自生的形成に関する理解に欠けている」(Ibid., 45)と特徴づける。かくして、ハイエク自身が「メモ」において提示した、「進化と自生的秩序の形成に関する一対の問題」に対する「正しい進化的アプローチ」の具体的内容が、FC において示されている。

(3) 生物学と社会科学における進化の違い

次に、「メモ」における二つ目の問題に戻る。すなわち生物学における進化と、社会科学における進化 (LLL 以降のハイエクの用語では文化的進化) との違いについてである。この点についてハイエクは、「メモ」において十分には論じていない。ただし同年に行われた「講演」で、両者の違いについて論じている箇所があるので、これを吟味しよう。

「講演」によれば、文化的進化は、獲得形質の伝達を認める点で生物学とは異なる。その重

⁷⁾ ハイエクの説明によれば、システム論では「自己増殖的秩序」を用い、社会科学では「自生的秩序」を用いるが、双方とも意味は同じである。「ひとつ私の述語について説明しておきたいのでも、このセルフ・ジェネレーティング・システムというのは、以前わたしは自生的秩序 (spontaneous order) と呼んでいたものであります。社会を考える場合には、この自生的秩序の方がよりよい表現だと思いますけれども、自然科学を考えてみると、システム論でも用いられているセルフ・ジェネレーティング・システムのほうがよりよい呼び方だろうと思うわけです (ハイエク—今西, 1979, 78)。

⁸⁾ 「私は、今のセルフ・ジェネレーティング・システムとダーウィンの適者生存の考え方の間に矛盾があるとは思いません。そのセルフ・ジェネレーティング・システムは、すべて、そのシステムを成り立たせている要素が、システムになろうとする性質をそなえている。しかもよりよいシステムになれば、その要素はより長く生き延びられる、ということがあるわけです」(Ibid., 77)。

要な具体例としてハイエクは、「道徳 (moral)」を挙げる。「道徳とは、人間の計画によって生み出されたものではないし、人間は、自分たちの理性をたいていの場合理解しない」(Hayek, 1983b, 2)。ところがダーウィニズムの提唱者は、文化的進化の結果として考察すべき対象を、種の進化と同様の法則を当てはめてしまった。ハイエクにとって、人間行動の結果たる社会システムは、生物学におけるような種の進化の結果として考察できるものではない。それゆえハイエクは、「社会ダーウィニズムは、疑いなく誤りである」(Ibid., 3)と結論づける。

進化論を社会科学に適用する際に、常につきまとう問題がある。それは、「良い(もしくは優れた)ものが残る」という発想は、すぐに「残ったものは良い(優れた)ものである」との考えに結びつき、さらに「よくない(劣った)ものは滅びるべきである」と転化することである。そのような進化論の恣意的な適用が顕著に見られたのが、ハイエクが生きた時代の「社会ダーウィニズム」であった⁹⁾。ハイエクは、進化論から危険な思想が生まれたことも十分知っていたであろう。言わばそれは、「誤りの進化的アプローチ」である。実際に、かれは「メモ」において「進化に関する生物理論のばかげた模倣は、『社会ダーウィニズム』として大変に信用を落とした」(Hayek, 1983a)と述べている。

ハイエクは、このような事態が生まれた一因を、生物学における進化論を、性急に社会科学へと応用しようとする試みにあるとみる。このためかれは、自らの進化的説明が社会科学への進化論の性急な適用を避けたうえで展開されていることを、強く主張する必要があった。例えばハイエクはLLLにおいて、文化的進化の概念は、生物学における進化概念よりも古く、前者が、後者に影響を与え、ダーウィニ的な進化概念が導かれたという知見を表している。「文化的進化という考えは、生物学的進化概念よりも、明らかに古い。チャールズ・ダーウィンによる生物学へのその応用は、もし同時代の法および言語の歴史学派から直接に影響を受けたのではないとするならば、かれの祖父エラスムス・ダーウィンを通して、バーナード・マンディビルやデビッド・ヒュームの文化的進化の概念から引き出された、ということもありうるであろう」(Hayek, 1979, 154/訳 213)。この説明は、ハイエクが、本来の進化論(文化的進化)の含意、つまり人間行動の結果を観察しその発展のプロセスを説明することが正しい進化的アプローチであり、なおかつ自らの進化論的説明がそれに続くものであると考えている証左と言えよう。

このようなハイエクの関心は、FCにおいても同様である。そこでかれは、文化的進化と生物学的進化がいかに異なるかに関して論じ、社会ダーウィニズムがいかに誤った進化的アプローチであるかを説明している。「(両者の)重要な違いについて挙げると、生物学的理論は今や獲得された形質の遺伝を排除する。その形質とは、生得的でなく学習された諸個人間の相互関係を導くルール体系における性質のことである」(Hayek, 1988, 25)。つまり、社会科学における進化論が、生物学とのそれと異なる点は、ひとつには獲得形質の遺伝を認めることにある。ここで重要となるのは、特に知識の伝達である。個人が行動する中で、その指針を得ることができるような社会的ルールが形成されていく。そこには試行錯誤の結果たる知識が反映されているのであり、それが次世代へと伝達されることによって、個人の行動の不確実性を減ずることを可能にしている。

上で明らかになったことは以下のように概括できる。ハイエクは、自然科学と峻別をつけた

⁹⁾ 歴史上における社会進化論の危険な側面については、例えば佐倉(2002)、Denett(1996)を参照のこと。

上で、社会科学における進化論の正しい適用とはいかなるものであるかについて述べる必要があった。そのことに関する問題意識を表明したのが「メモ」であり、内容について具体的に述べたのが、「講演」である。そしてこれについて、かれは、FCにおいても引き続いて議論している。

(4) 科学的知識と人間の道徳の進化

最後に、ハイエクがこの「メモ」のなかで最も重要と位置づけていた問題、つまり「科学的知識は人間の道徳の進化に関してどのようなことを正当に言えるのか？」に関して吟味しよう。

ハイエクは、かつて論文「社会科学における事実」(Hayek, 1943)において以下のことをはっきりと示した。それは、社会科学とは、社会現象を人間行動の産物として扱うべき学問であること、そしてそこには人間の心理等、非常に多くの不確定な要素が含まれていることである。ゆえに純粋な自然現象のみを観察する自然科学と社会科学は、対象およびそれに対するアプローチがまったく異なる学問である。このように考えるハイエクは、以前より、自然科学を社会科学へと性急に適用することに反対していたのである¹⁰⁾。

上に見たように、社会において行動する人間が、常に合理的な判断を下す存在ではなく、それが時に不確定なこともあると捉えるかれの人間観は、「メモ」以降のハイエクの著作においても同様である。つまり、人間は誤りうる存在である。だからこそ、先人の試行錯誤の知識が蓄積された道徳に従うことで、これまでなんとかうまく行動してきたのである。「私の主な主張は、われわれが負う以下のような事実であろう。かくして、我々の道徳がいくつかの点でわれわれの理性がなしうる以上の能力を有しており、それは、いわば個人の精神が決して気付いてこなかった状況に関する適応である」(Hayek 1983b 1)。

「メモ」で用いられている「道徳(moral)」という概念も、同じことが言える。ハイエクが使用する意味での「道徳」とは、伝統や慣習と言い換えることができよう。これをかれは、「自然のものでもなく、合理的なものでもなくて、文化的伝統のまだ理解されていない発展の産物」(Hayek 1983a)と言い換えている。これはハイエクが多用する「人間的行為の結果であるが人間的設計の結果でない」(Hayek 1973, 20/訳30)現象である「自生的秩序」の定義と重なる。これを進化的なプロセスになぞらえて説明することが、「メモ」に記されているかれの目的のひとつであった。

ハイエクは、道徳を人間理性の産物と看做さないアプローチの方法が、ヒュームによってすでにはっきりと述べられていたとみなし、「メモ」においても「それは私が言うべきすべてのことの土台となっているだろう」と記している。ハイエクはしばしば、自らがヒュームやアダム・スミスら、スコットランド啓蒙の学者から影響を受けていると述べる(Hayek, 1979 154/訳213)。そのことは「講演」においては、以下のように詳述されている。「デビッド・ヒューム、アダム・ファーガソン、アダム・スミスら、スコットランド学派の創始者たちは、すべての行動に複雑な現象の説明に対する普遍的な鍵となってきた進化と自生的秩序に関する一対の概念を、発展させてきた」(Hayek, 1983b 3)。つまり、ここでかれがスコットランド啓蒙の学者がそうであると同様に、かれの社会理論にとって、「自生的秩序」と「進化」は、どちらも不可欠なものであり、一対にして使われている概念である。

そして「メモ」によれば、「自生的秩序」と「進化」を一対に扱うこのアプローチが答えう

¹⁰⁾ ハイエクの方法論に関するより詳しい考察については、拙稿(吉野 2005)を参照されたい。

る問題として、次の二つがある。それは、「何がわれわれの道徳を決定したのか？そして、それらはわれわれに対して何をなすのか？」である。それに関して、ハイエクはここでは明らかな回答を用意していない。しかし、かれはこれを記した半年後、「われわれの道徳の起源と効果：科学への問題」と名付けられた「講演」において詳述している。上の「メモ」における問題提起と「講演」における回答は、以下のように対応している。すなわち、「何がわれわれの道徳を決定したのか？」に関する問題が「道徳の起源」として、また「われわれに対して何をなすのか？」が「道徳の効果」として、その回答を与えられている。ここでの二つの問答について、さらに検討しよう。

まず、道徳の起源に関して述べる。ハイエクにおける道徳とは、環境への適応と共に淘汰が起こるなかで発展してきたものであり、単一の理性によって設計されたものではない。「道徳的ルール」の伝統とは、個人的観察によっては利用できなかったり、理性によっては知覚できなかったりするような、われわれの環境における状況への適応を含み、「かくしてわれわれの道徳は理性の創造物ではなくてそれが理性のみによっては決して発見されたり正当化され得ない人間行動へ導くために、理性よりもまさに優れている」(Ibid., 4)。では、何が優れているのか。ここでは、生き残りに作用する適応度であると考えられよう。

進化の結果残った道徳には、個人の試行錯誤の結果判明した行動に関する知識が堆積しており、さらに自生的秩序、ここでいう「拡張された秩序」の存在は、諸個人にその知識を有効に利用させることを可能にする。「人間は何十億もの暮らしを引き出させるほどの秩序を設計するほどには、ましてかれがそれらの努力を成功するべく行うために知らなければならないことを認識するほどには、決して賢くはない」が、しかし、「誰かの知覚を超えて拡張された秩序の働きを通じて、何十億ものその種を生存ならしめうる最も重要なある資質を、人類は持っている」。そして、「そうすること(筆者注：生存)を可能ならしめることは、彼がそれらを理解することなしに集団選択によって選ばれた伝統的な慣習に従うことである」(Ibid., 6)。ハイエクによれば、人間は、自分がなすべきことをすべて理解できるほどには賢い存在ではない。しかし、進化過程を経て残った慣習—ここでは道徳とほぼ同義であろう—に従うことで、結果として生き残りの確率が高まるのである。

さらに一個人の持つ知識は断片的なものであるというハイエクの知識論からすれば、従うべき道徳を一代で作ることができるほど、人間は賢い存在ではない。この意味で、理性によって制度を設計しようとする試みは、ハイエクからみれば「理性の思い上がり」である。しかし、道徳に、さらに言えばそこに存在する行為のルールに(意識的にであれ、無意識的にであれ)従うことによって、行為の不確実性を減じことはできる。先人たちの試行錯誤の産物として、知識が蓄積されており、それが利用可能だからである。結果的に、道徳に従うことが、知識の有効利用につながるものであり、それが引いては生き残りの可能性を高めることになる。「合理主義が間違っていることと、伝統的な道徳は合理的な知識よりも確かなガイドを人間の行動にもたらすことを示すのが、この講演の主な主張である」(Ibid., 12)。ここでハイエクは、人間にとっての道徳の起源を、はじめからあったものでも、設計によるものでもなく、進化プロセスを経てきたことに求める。そしてそれは、「合理的な知識」による設計主義的な制度設計への反論でもある。

次に道徳の効果について述べる。道徳が進化過程を経るなかで、人類の生き残りに有効に作用することは上に述べた。そのようにして残った道徳は、より直接的には、人類にどのような影響を与えるのか。ハイエクによれば、進化の過程で生き残った道徳は、人間にとっては、む

しろその欲望を抑制する働きをもつという。「(道徳は) われわれの欲望に対する獲得された抑制である」(Ibid., 17)。ここでかれは、人間が本来求めるのは、近視眼的な美しさや快楽であるとみなしている。この近視眼的な目標は、道徳に従うことと必ずしも整合しない。「われわれは、それら(道徳)が、美しさや快楽など、われわれが一般的に望むものを生み出すのではないという事実に従わなくてはならない」(Ibid., 17)。

ハイエクは、道徳を、人間が望むものを提供するために機能するものではないと考えている。「道徳とは、われわれが進もうとする方への進化を目指すことをわれわれが選ぶことを可能にする手段ではない」(Ibid., 16)。「道徳は、われわれが望みうるものを得るための道具であるという知見は、全くもって誤りである」(Ibid., 17)。先にも述べたように、文明社会のメリットは、われわれが知らぬ間に道徳に蓄積する知識を利用できることにある。言い換えると、人間は道徳を、さらにそこに存在する知識を自らの思うがままに利用することはできないのである。

ハイエクはここから、進化の方向についても言及する。「計画された進化は、進化の終わりを意味するだろう。特定の道徳の進化は、人々が望む方向を向いてはいないし、またそうすることもできないのである」(Ibid., p.18)。かれにとっては、人間が自ら欲するように進化を企てることは、もはや進化ではない。拡張された秩序が進化してきたことによるメリットは、自らによっては到底到達できない知識を使用できることにある。そこで秩序の進化を便宜的にもたらすことは、人間がその時有する知識の範囲内での進歩しか生まないことを意味する。人間が、道徳を自ら望むものを求めるために使用し、また進化を自らが望む方向に向けようとすることは、かれにとっては理性の傲慢であり、同時に社会の発展をもたらさないことにつながるのである。

最後に、ここでの「講演」の内容が、「致命的な思い上がり」と題名が付けられた最後の著作に直接的に反映されていることがわかる文章を、以下に引用しよう。「わたしが今取り組んでいる本の題名である『致命的な思い上がり』という言葉は、『人類は自分自身で作られる』という誤った信念を的確に拒否することに貢献している」(Ibid., 18)。ハイエクはこれまで、社会を人間理性によって設計する「合理主義」を、常に批判の対象としてきた。かれはこうした一貫した立場で、FCを世に出そうとしていたのである。

4. 結語

本稿は、これまでかれの主著には収録されていかなかった、1983年に書かれた「メモ」と、それをもとに同年に行われた「講演」を中心に検討した。そのなかで、ハイエクの最後の著作『致命的な思い上がり』の成立過程が浮かび上がってきた。特に、ここで明らかになったことを、はじめに学説史的な側面、次に理論的な側面として、以下にまとめる。最後に、本稿の主張を記しておきたい。

上で示したように、1983年に書かれた「メモ」は、問題を提出したにとどまり、それらを具体的に詳しく論及しているとは必ずしも言えない。しかしながら、後の「講演」にそれは結実し、その「講演」は、最後の著作FCにつながっていることが明らかになった。それゆえこの「メモ」は、1983年当時のハイエクの思考をまとめ、次に考察すべき課題を明らかにしただけでなく、FCの原型の一部をなしていると言えよう。また「講演」と合わせて、1985年以降、主立った文章を残していない、最晩年のハイエクの主張や、問題意識が詰め込まれていると言える。

さらに、この「メモ」と「講演」においてハイエクが展開した「自生的秩序」と「進化」の

関係に関して述べる。ハイエクはLLLにもFCにおいても、「自生的秩序」と「進化」との関係性を明確に説明することはなかった。しかしながら、かれの理論において二つの概念は常に「一対」になって初めて意味を持っている。ハイエク社会哲学をめぐる批判のなかで目を引くのは、「自生的秩序」と「進化」が両立しないことを指摘するものである¹¹⁾。しかし、ここで明らかになったように、ハイエクは自生的秩序を支える一つの例として、行為の繰り返しという濾過・選別の過程を経てきた道徳を重視する。つまり、従うべき道徳であるという妥当性の根拠を、進化過程を生き残ってきたという事実を求める。最晩年のハイエクの目的のひとつは、理性による合理的設計を退ける理論の構築にあった。そのためには、自生的秩序だけではなく進化概念は不可欠であり、かれの理論のなかで両者が一対であることは整合している。

1941年の『資本の純粹理論』執筆以降、理論経済学から離れたハイエクは、社会哲学の分野の研究に関心が移行する。かれが批判の対象としたのは常に、マルクスやケインズといったその人物ではなく、人間が社会を総体的に把握し、それを理性的に設計できると考える「思い上がった」方法論や思想そのものにあった。本稿の検討からわかるように、その試みは、最後の著作FCまで続いたのである。

FC成立過程において、ハイエクの意図がどれほど介在しているか、に関しては、今後も引き続いて検討されるべき課題であろう。しかしながら、本稿においては、1983年に書かれた「メモ」、1985年の「講演」、そして1988年のFCに至るまで貫かれている、「進化と自生的秩序」からなる双子の概念の重要性を再確認した。もし、FC成立過程事情に疑義が生じ、その妥当性を疑う声があがったとしても、ハイエク最晩年の社会理論における「双子の概念」の中心的位置については、かれ自身の意図を大きく外れたものではない、と言えるのではないか。今後ハイエクの未公開文書の調査がさらに進むことが予測される。そこでのFCをめぐる「真贋論争」は、全体の真贋を問うのではなく、ハイエクの主張の意図がどこにあったのかをめぐって議論される必要があるだろう。

[2007年12月 レフェリーの審査を経て掲載決定]
(京都大学大学院経済学研究科・研修員)

参考文献

- Boettke, P. (ed) 2000. *The Legacy Of Friedrich Von Hayek*, Edward Elgar Publisher.
Caldwell, B. J. 2004. *Hayek's Challenge*. Chicago University Press.
Ebenstein, A. 2001. *Friedrich Hayek-A Biography*. St. Martins Press.
Dennett, D. 1996. *Kinds of Minds*. Basic Books.
Hayek, F. A 1943. "The Facts of the Social Sciences". In Hayek (1948): 57-76.
———1948. *Individualism and Economic Order*. London: Routledge & Kegan Paul. 嘉治元郎・嘉治佐代訳『ハイエク全集3 個人主義と経済秩序』春秋社, 1990.
———1960. *The Constitution of Liberty*, University of Chicago Press. 気賀健三・古賀勝次郎訳『ハイエク全集5, 6, 7 自由の条件』春秋社, 1986, 1987, 1987.

¹¹⁾ ハイエク進化論をめぐる批判は、吉野(2006b)において、以下の三つの点で再構成した。1. 方法論的個人主義と集団主義の齟齬, 2. ハイエク進化論の理論的未熟さ, 3. ルール進化に関する現実的妥当性の欠如。コールドウェルは、この点に関して同様に、近著「Hayek's Challenge」において5つの点でまとめている(Caldwell, 2004, 352-361)。それらは基本的には進化論自体が持つ説明力の無さと、ハイエク進化論の素朴さの二つに集約されよう。

- 1967a. “Notes on the evolution of systems of rules of conducts” in Hayek (1967b): 66–81.
- 1967b. *Studies in Philosophy, Politics, and Economics*, London: Routledge & Kegan Paul.
- 1973. *Law, Legislation, and Liberty, Vol. 1: Rules and Order*, London: Routledge & Kegan Paul. 矢島 鈞次・水吉俊彦訳『ハイエク全集 8 法と立法と自由 1 : ルールと秩序』春秋社, 1987.
- 1976. *Law, Legislation, and Liberty, Vol. 2: The Mirage of Social Justice*, London: Routledge & Kegan Paul. 篠塚慎悟訳『ハイエク全集 9 法と立法と自由 2 : 社会主義の幻想』春秋社, 1987.
- 1978. *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*, London: Routledge & Kegan Paul.
- 1979. *Law, Legislation, and Liberty, vol. 2: The Political Order of a Free People*, London: Routledge & Kegan Paul. 渡部茂訳『ハイエク全集 10 法と立法と自由 3 : 自由人の政治的秩序』春秋社, 1988.
- 1983a. “Evolution and Spontaneous Order”. Hoover Institution, Hayek Archives, Box110, Folder26 (typescript, unpublished piece).
- 1983b. “The Origins and Effects of Our Morals: a Problem for Science”. Hoover Institution, Hayek Archives, Box103, Folder35. in Hayek (1985).
- 1985. *The Essence of Hayek*. edited by Chiaki Nishiyama and Kurt Leube. Hoover Institution Press.
- 1988. *Fatal Conceit: The Errors of Socialism, The Collected Works of Friedrich August Hayek, vol. 1*. London: Routledge.
- 1992. *The Fortunes of Liberalism: Essays on Austrian Economics and the Ideal of Freedom The Collected Works of Friedrich August Hayek, vol. 4*. London: Routledge.
- Kresge, S. and Wenar L. 1994. *Hayek on Hayek: An Autobiographical Dialogue*. 嶋津格訳『ハイエク, ハイエクを語る』名古屋大学出版会, 2000.

- ハイエク・今西錦司, 1979. 「自然・人類・文明」NHK ブックス 352, 日本放送出版協会。
- 江頭進・塘茂樹, 2004. 「ハイエクに対するシュパンの影響——学位論文とその後」『経済学史学会年報』, (45) : 26–39.
- 橋本努, 2006. 「F. A. v. ハイエター人間像の考察」橋本努編『経済思想第 8 巻 20 世紀思想の諸潮流』, 249–307.
- 佐倉統, 2002. 『進化論という考えかた』, 講談社新書。
- 嶋津格, 1985. 『自生的秩序』, 木鐸社。
- 吉野裕介, 2005. 「F. A. ハイエクの主観主義—G. L. S. シャックルとの対比より—」『経済論叢』, 175–5/6: 108–124.
- 2006a. 「ハイエクにおける『自生的秩序』と『進化』の関係について—ハイエク文庫の調査から—」『21 世紀 COE 京都大学先端経済分析ディスカッションペーパーシリーズ』, (98) : 1–15.
- 2006b. 「F. A. ハイエクにおけるルールの進化論をめぐる」『経済論叢』, 177–3 : 1–23.

付 録

“Evolution and Spontaneous Order”,

Hoover Institution, Hayek Archives, Box110, Folder26 の翻訳

進化と自生的秩序

リンダウにて 1983年6月28日

私が選んだテーマを自然科学者も興味を持ってもらえるように経済学者として提供することとは、われわれが取り扱うべきどんな構造の複雑性も、「パターン説明」を満たすよう押し進めること、のようである。私は人間の相互作用の問題に関する研究によってこれに導かれたのである。二十何年以上前に、私が進化と自生的秩序の形成に関する一対の問題の間にある、密接な関係に特に引きつけられて以来、正しい進化的アプローチが、人間行動の秩序に関して最も議論のある問題のいくつかに対して、決定的な答えをもたらすことが徐々にわかってきた。しかしながら、進化に関する生物学理論のばかげた模倣は、「社会ダーウィニズム」としてそのような企てに関して大変に信用を落としたので、私は中心的な問題に戻る前に、以下のことについて述べなくてはならない。

最初に、人類における進化概念の起源に関して少し、次に生物学と文化的進化—単に同様の方法での選択がある—とのメカニズムの間の決定的な差について、最後に、科学的知識は人間の道徳の進化に関してどんなことを正当に言えるのかについて述べる。三つ目のことは、私の主な課題となるであろう。

人間の道徳の進化に関するそのような理論の発展に対する主な障害は、「存在」から「当為」への架け橋など無い、という真実の洞察であった。これは近代においてマックス・ウェーバーによって強調されたことだが、しかしすでにデビッド・ヒュームによって、はっきりと述べられていたことである。実際に私が言うべきすべてのことの土台となっているヒュームの非常に重要な認識から判断すると、それはいわば「道徳のルールはわれわれの理性の決定ではない」ということである。

私の論点は、それらは真に自然のものでも合理的なものでもなくて、まだ理解されていない文化的伝統の発展の産物であろうことである。私がこれについて説明しようとしている例は、(財)供給システムもしくは私有財産制である。

そのようなアプローチは、われわれが科学的なもしくは事実に基づいた、二つの厳密に科学的なものもしくは事実上の問いに関して答えようとすることを明確に許し、それどころか強く要求する。その問いとは言わば、何がわれわれの道徳を決定したのか？そして、それらはわれわれに対して何をなすのか？である。われわれが近代世界において発見した他の複雑な構造がいかにして形成されたのかと、それが一般的に信じられているほどには近代のものではないというわれわれの解答とは、類似した問題である。それは長い間、生物学ではない、ゆっくり発展してきた少数の分野に限られてきたけれども、大変重要な帰結をもたらしている。

私が好んでそう呼ぶような、人間の制度もしくは形成に関する二つの研究において、われわれは古代においてすらその関心を見つける。それは、法と言語の研究であり、古代ローマの学者ですら気づいていたこの二つの類似に関する研究である。ソクラテス以前の何人かのギリシャ哲学者達のなかには、進化的アプローチをとっているものもいる。しかし、これら二つの特別な分野以外では、これらの始まりは、道徳の解釈に関するもっとも深みのある影響を通じて、進化的思考としては全面的に奇妙なアリストテレスの巨大な影響によってもみ消された。

この問題におけるアリストテレスに関しての私の解釈は、長い間疑問であり、そしてそのことは奇妙かつ重要であるので、私はもうすこし時間を割こう。アリストテレス自身に関する限り、今や私の解釈は、そうであることを願うのだが、以下の最も権威的な根拠によって確かになっている。それは、「あの時代のアリストテレスの巨大な影響を考慮すれば、アリストテレスの反・進化的立

場は来たる二千年間の発展に決定的に重要である」と結論づけているエルンスト・マイヤー教授の意義深い新しい著作『生物学的思想に関する成長』（1982）である。

われわれは、以下のことを付け加えるであろう。それは、（アリストテレスの思想は）生物学に制限されるだけでなく、ある社会にとって良きものにも等しく適用されることであり、アリストテレスの見方では、商業的活動のようなものは、そのとき存在する社会をそのまま維持するために必要な程度でよい、ということである。たとえばアテネが、それが存在した時期に、その人口をいかにして著しく増やしたかに関する問いは、決してアテネの学者達によって考察されてきたようには見えない。

アリストテレスの経済的な道徳が、現在に至るまである程度キリスト教を支配するようになったのは、もちろんトマス・アクィナスを通じてである。そしてそれは、経済学者が今日においてすら戦わなくてはならなかったこの蓄積からもたらされる道徳である。